大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

西村徹先生を送る

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田川, 建三 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10499

西村徹先生を送る

田　川　建　三

西村徹先生がこの3月で停年退職されることとなった。残される者の立場からすれば，まことに残念なことだが，これも世の定めとあればいたしかたない。形式的な儀礼がお嫌いな先生のこと，いや，感情的に嫌いというのではなく，無意味な儀礼が時として不当な力を作り出す世の中のあり様に対してきびしく批判しておられる先生のこと，この紀要についても，れいれいしく写真を飾ったり，年譜や業績表を掲載するのも遠慮なさった。それで，この送別の辞も，誰かが英文学科を代表して書く，というのではなく，年齢はいささか異なるけれども，一人の友人として私が思い出を記させていただくこととなった。

とは言うものの，細かいことは御存じのない読者も多いだろうから，簡単に年譜代りの紹介をさせていただく。西村さんは1926年3月19日，伊賀上野の商家に一人息子として生れた。古い文化の伝統のある町に生れ育ったことにある種の自尊心をいだいておられるように見える。もっとも，生活のスタイルや趣味はいかにも大都会的で，新しい文化的刺激を求めては都心を歩きまわられるのが性にあっているようだ。

この世代のすべての人々に多かれ少なかれあてはまることだが，彼の青春も戦争体験に色濃く支配されている。金沢の旧制第四高等学校に入学したのが1943年4月，すでに日本帝国の敗戦がひしひしとせまっている頃であった。落ち着いて勉強できる環境ではない。1945年の夏，戦争の終る直前に徴兵され，豊橋の工兵隊に入れられる。ここにその時期に配属された人で，生命を落とした人も多かったのだから，ほんの僅かな運命の違いが恐ろしく感じられる。幸いにして彼の属した分隊は戦地に送られることも，はげしい空襲にさらされることもなく，掛川と袋井の間の茶畑の見えるあたりでわけもわからずにうろうろしているうちに終戦をむかえる。その分

隊の名前は「独立工兵107大隊に隊4班」という。自分が何年に大学を卒業したか，というようなことも，今となっては指折り数えてよく考えてみないとわからないくせに，この軍隊の名前だけは瞬間的にすらすらと出て来る。軍隊体験がどれほどの重圧であったか，そこからおのずと想像がつく。

さて，無事に生きのびた彼が，その世代の多くの人々と同様，戦後の経済的にきびしい時代にもいろいろ苦労のあったことは察せられるが，1951年3月に無事大阪大学文学部文学科英文学専攻課程を卒業された。そして1ヶ月おいて同年5月に本学英文学科に就任。その時点で彼はまだ25歳。以後38年間をずっと通して（途中1965年夏から一年間，大学からの出張でエディンバラに留学なさったが），この大学ですごされる。半生という以上に長い。戦争に支配された暗い青春以外の人生のほとんどすべてを大阪女子大学ですごされたわけだ。もっとも，この先また新しい場所でまだ長い人生を歩まれることだろうから，通算すれば，半生よりやや短い，というところか。

さて，大学の教師になってすぐにこの人の青春がぐんと明るくなる。その僅か2年後に吉村夫佐子さんが英文学科に入学される。もっとも，その直後からお二人が非常に親しい関係になられたのかどうかは，誰も知らない。いろいろ噂のあるところだが，遅くも彼女が4年生の時の夏には両者ともその気になっておられたようだ。当時在学した卒業生の間では，英文学科以外の人でも，何しろ有名な話であるので，正確な事実を多少詳しくここに記しておきたかったのだが，御本人はなかなか口を割らない。当時はまだ大学全体で修学旅行なるものがあり，4年生の夫佐子さんは北海道に行く。その間，多くの手紙が徹さんのところにとどく。短い修学旅行中，しかも多くの友人と四六時中共に時をすごす旅行中に，絵葉書どころか，長い手紙を何通も書かれたのだから，あとはおして知るべし，というところ。もっとも，徹さんが旅行中の夫佐子さんあてに手紙を送ったのかどうかは知らない。夫佐子さんの卒業された1957年の5月に二人はめでたく結婚された。その後32年。息子さん，娘さんともにすでに成人され，双方にお孫さんが生れている。

学者としての西村さんについては，主な翻訳を二つだけ紹介しておけばよろしい，と御本人がおっしゃるので，ほかにも数多くのすぐれたお仕事を残していらっしゃるのだが，ここでは残念ながら，具体的な指摘はその二点に限らせていただく。書物として最初に出版されたのが，ギリシャの抵抗詩人ミキス・テオドラキスの『抵抗の日記』（杉村昌昭さんとの共訳，河出書房新社，1975年12月）である。みずから多くの歌を歌ってレコードも世界中でよく売れているこのすぐれた詩人の真実の姿を日本の読者に紹介された功績は大きい。他方，いちばん新しい出版が，A・バージェスの『英文学史』（蜂谷昭雄さん，岡照雄さんとの共訳，人文書院，1982年10月）。こちらは非常な大著で，お一人の担当分だけでも本一冊になろうかという大仕事であった。内容は，バージェスという実に独得なくせのある評論家が，英文学の長い歴史を自由濶達に論じた面白い本である。この年以降，西村先生の「英文学史」の授業のテクストにも用いられているので，最近の学生諸君はよく御存じであろう。

さて，この二冊は西村さんのお仕事のほんの一端にすぎないが，ここで私見を述べさせていただくと，翻訳というのは決して第二級の仕事ではなく，特に，外国の文学・言語を専攻した学者にとっては，重要な作品を正確で読み易い翻訳で紹介する作業こそ，まず果たすべき第一級の仕事であると思われる。その点で彼はすでに大きな責任を果たしたと言えよう。ここはその内容について論評する場所ではないし，私にその資格もないが，内容とは別に一言だけ言わさせていただくと，その日本語の文章のみごとさである。単に文章がうまい，というだけではなく，英語と日本語という二つの大きく異なる言語の間の距離を正確にはかりつつ，日本語としてさまになる文章にしていく彼の作業は天下一品のものである。それは，単に御本人のお仕事に現れるだけでなく，大学の教室での授業で学生たちが日々彼のこの姿勢によって訓練されていく。彼のおかげで，なるほど，翻訳とはこういうことか，言語を理解するとはこういうことか，日本語を書くとはこういうことか，とある程度理解できるようになった学生が多かろう。我々の世代となってはもはや，彼のある意味では古風な日本語の真似はできないが（だいたいこんなところで「彼」などという単語を使うと叱られ

る)，しかし，日本語の特質を把握した文章とはこういうものか，と教えられる。

バージェスの翻訳の後，最近は，ジョージ・オーウェルの作品にかなり集中して取り組んでおられる。それ以前からもかなり手がけていらっしゃったが，特に最近は集中しておられるように見受けられる。やがてその作業が何らかの形の出版物となって現れるのを我々は楽しみにしている。

翻訳の件に関連して思い出されるのが，最初の翻訳を出版なさった年の5月に，胃の手術をなさったことである。その前の時期に，御本人にはまったく責任のないことで面倒な事件を一つ背負い込まれたり，その他いろいろお疲れがたまっておられたのであろうか。胃を半分弱切り取られた。私事で恐縮だが，私がはじめて西村さんにお会いしたのは1972年の春，たまたま堺市に住んでいたので，当時堺市の大気汚染の問題など反公害の運動の中心におられた西村さんが，一緒に活動しないか，と誘いに来られたのである。残念ながら，私はその直後にヨーロッパに移り住むことになったので，あまりおつきあいいただくことはできなかったが，その時の縁もあって，帰国直後の1978年春から私もこの大学にお招きいただいた。ちょうどその間の時期に胃の手術をなさったのだが，はじめてお会いした時の精悍で力強い雰囲気と，大学の同僚になってお会いした西村さんのいかにも胃をかばっておられる，多少の好々爺的雰囲気とでは，ずい分へだたりがあった。胃の手術というものがこれほどまでに人の体力を変えるのかと驚いたものだ。その手術の前後にテオドラキスの翻訳を仕上げられたのだから，大変なものだ。しかし幸いにして，その後胃もかなりお丈夫になられたようで，1978年頃にはアルコール類はほぼまったく口にされなかったのに，今では適量をうまく楽しんでおられる。

教師としての西村さんについてふれる紙数がなくなってしまったが，クラス担任を3度(1961年，1972年，及び1988年の卒業のクラス)なさっただけでなく，それ以外の年度の学生も毎年ゼミ，卒論等で多くお世話になり，大学院ができてからは，それ以前の卒業生も西村先生をしたって大学院にもどってくる，といった具合で，影響力の大きな存在であった。今やこれを「であった」と完了形で書かねばならず，学生たちにとって彼のぬける

穴がいかに大きいかを思うと，暗澹とした気持ちになるが，後に残った者が何とかして埋める努力をする以外にいたしかたあるまい。

本学をおやめになられたあと，この4月より，桃山学院大学に新設される文学部英文学科の教授に就任される。新しい職場でまたこれまでにもまして面白い活躍をお続けになるように，そしてまた，御停年とはいえまだまだこれからの人生，末長くお元気にすごされることを祈って，お送りしたい。